

連載 第12回 福聚山史

篠原 重一 文
及川 一晋 編

祖師堂のお祖師さま

2、感応胎蔵祖師像の由来

その後の祖師像の行方は、三田村薫魚の著作『帝国大学赤門由来』の一部に次の如く記載してあった。

家齊の肖像と見るべきお祖師様は、市外柏木の常円寺にあると聞いて就見したが、木像のみが感応寺の旧図、その他も蔵存している。

この論考は大正八年四月四日の初出刊行であるので、著者薫魚はその頃新宿常円寺で祖師像の確認を行っているということが分かる。常円寺の執事上人より聞いた内容と一致したが、はたして、いつ、どのような事情により池上より常円寺にお移りになったのかが知りたかった。幸いにもその念願はすぐに達せられた。高橋源一郎編『武蔵野歴史地理』の第一冊、雑司谷感応寺の項に、感応寺祖師像は一旦本門寺へ戻されたが、その後、明治五年七月二十六日牛込築土萬昌院境内に移し、更に淀橋に移したと伝えるとあった。

更に、齋藤月岑著増訂『武江年表』の明治五年七月二十六日の項によると、

嵐山なる感応寺に一旦ありし祖師の像、廃寺の後池上本門寺へ移し置きしを、今日牛込禅宗万昌院の境内を借りて堂宇を嘗み、此所へ移しまるらすとて法華宗の講中列の旗を立て、芝金杉通りより通り町筋迄、西へ佐柄木町稚子町四軒町猿楽町水道橋通りを送る(諸人群集す)。後に淀橋へ移す。

祖師像は、多くの人々に支えられた御興



第一駐車場 このあたりが戦前の祖師堂の背面と思われる。祖師像もここに鎮座されていたのである。

に乗り本門寺を離れ、池上道を品川へ向かう。東海道に入り左側、海沿いの街道沿いに南品川・北品川の宿を過ぎ、大木戸を抜けると芝橋である。三十一年前、感応寺が破却し祖師像が池上に御退座の折り、大東院師がお別れした芝榮門寺(池上の宿院)を過ぎ金杉橋へ。人々が集まり、行列は京橋・日本橋へと続き須田町を西へ。神田より飯田橋を経て、さらに牛込御門を右に神楽坂を上り、右側の万昌院(現在の厚生年金病院看護学校、宿舎)に入るといふ半日の行程であった。

徳川幕府が瓦解した後の江戸の町では、諸大名は府内の藩邸を去り国元へ、また旗本は給地へと帰る者が多かった。下級武士の住む組屋敷までもが閑散となり、一部は茶・桑畑に変じた程である。江戸市民の離散は影しく、江戸は寂れていった。そんな世情では排仏毀釈に表れたように、庶民の信仰心も失われてしまったのではなかつたか? しかし、そのような中でも『武江年表』が物語っているように、温かく、熱烈に祖師を迎える人々がいたのである。祖師像の開帳の効果は種々あろう。新時代の中で鬱積した庶民のノスタルジーを喚起する意味もあつただらうし、仏教を再興しようという気概



平成14年10月、中庭にあった「便々館湖鯉鮒狂歌碑」を青梅街道よりお寺に入って右側、旧祖師堂跡へ移設す。

もあつたであらう。ともかく時代の潮目の中で様々な意向が働いたことは確かであろう。しかしながらなお疑問に残るのは、この開帳の場所を近くに日蓮宗寺院がありながら禅宗の堂宇を借りてまで、なぜ行ななければならなかつたのか? また、どうしてその後池上に二度と戻ることなく、成子常円寺にご遷座されたのか? である。ただ確実なことは、徳川十一代將軍家齊公のお姿を謹刻したという「感応胎蔵祖師像」が幾多の変遷を経たにも係わらず、この平成の世に、常円寺祖師堂にどかとお座りになつていくといふことである。(つづく)